

人権ほつと三年二月号

「目隠しのオーディション」

大阪教育大学教授

安達 智子

皆さんは、誰が歌っているか、奏でているか分からないけれども心惹かれる歌や音楽に出会ったことはありませんか。音楽の世界には、ブラインド・オーディションすなわち目隠し状態で行う選考があります。審査者による先入観やバイアスをなくすために、演奏者の経歴を伝えずに、誰が演奏しているかも隠したまま行うオーディションです。そうすること、他の要因を排除して演奏の技量だけを評価しようというわけです。この形式を採用したオーディション番組が海外でヒットしたことから、ブラインド・オーディションは一気に人々の間で知られるようになりました。目隠しで行うと選考にはどのような効果があるのでしようか。実在する交響楽団のデータを分析した報告によると、ブラインド・オーディショ

ンを行うと演奏者が見えるかたちで行った時よりも、白人男性以外のさまざまな人種、国籍、そして性別の演奏者の通過率が高まったとのこと。つまり、オーケストラの奏者≠白人男性という固定観念から審査員が解放された結果だといえるでしょう。ここで用いられたデータは限られた楽団のものであり、解釈にはさまざまな意見がきかれませんが、性別や人種、個人の属性や見た目の影響をできるだけ排除して、純粹に演奏のスキルだけで奏者を評価しようという試みといえるでしょう。同様に、建築や運輸など男性が多い領域、美容や保育など女性が多くを占める領域でも、応募者の性別情報を隠して選考すると、採用される人の構成が違ってくるかもしれません。日本ではまだ少数ですが、履歴書に性別の記載や写真の添付をもとめない企業・団体が徐々に増えていきます。そうした工夫や試みの効果が今後どのように出てくるかを見守りたいと思います。